



の中の

子どもたち

第12回 アシタ 明日の空の向こうに

—子どもは未来である—

川崎 二三彦

虐待死の検証

ことさらに発言したいわけではないが、子どもの虹情報研修センターで勤務するようになってから虐待死事例を検証する機会が増え、最近も幼い子どもが餓死する事件について考えることがあった。

こうした事件を前にすると、なぜこのような事件が生じたのか、私たちはその背景や要因を知りたくなる。

そこで本事例を振り返ってみると、餓死事件に先立つかなり以前、すなわち母親がまだ19歳の頃に流産するという出来事があった。相手の男性は現在の夫で、年齢は一回り上。この男性と母の実家は流産をめぐる揉め、関係が悪化するのだが、母はそれを機に男性と同居し、何人かの子を産み、結婚する。こうしたことが背景にあってのことだろう、家族が困難に陥ってネグレクトも深刻化し、いよいよ援助が必要となった時、頼るべき実家との関係が断たれていた母は、事件を防ぐきっかけさえ掴めないまま、加害者となって虐待死の片棒を担ぐしかないのであった。

他方、継母が39歳で妊娠し、実家に強く反対された中で同じように子どもが餓死した事件があった。相手男性は、先の例とは対照的に10歳以上年下。しかし女性の39歳と言えば、“これを逃せば次はない”という切羽詰まった思いに捕らわれても仕方がない時期だろう。この妊娠が、同居男性の子の養育に影を落とし、焦りを生んで破局へと繋がっていく。

2つの事件はともに餓死という結末を迎え、いずれも妊娠という出来事が微妙に影響していると思われたが、だからといって、それでネグレクト死の

全てが解明できるわけではない。彼らの生育史、家族の背景、援助機関の取り組みその他、さまざまなことを調査し、吟味しなければ、納得を得ることなど到底できないのである。

ケースワークが邪魔をする

ケースワーカーとして長年働く間に身体に染みこんでしまったのは、そんなことを考え続ける性癖だ。相談を受ければ、まずは主訴を確認して問題の所在がどこにあるかを探り、家族図を描き、生育歴も把握して、つまりは子どもや家族をまるごと理解して解決に当たろうとする。

だからであろう、この映画、正直に言うと、観ている間ずっとストレス続きだった。なぜと言って、ここに出てくる3人の子どもたちが、どうして駅舎で暮らしているのか、彼らの家族のことや生活史は微塵も説明されないからだ。

「いや、どこの国にだってホームレスの子どもはいるはずだぜ」

なるほど。しかし百歩譲ったとして、では、どうして子どもたちは国境を越えようとするのか。彼らの住むロシアの国情も向かう先のポーランドのそれも理解していない私には、彼らがそこ



までする動機が皆目検討つかないし、いかにフィクションとはいえ、どうにも不自然さが否めないのがあった。

ただし、映画を見終わって読んだパンフレットに、「実際の事件は2005年に起きた」「(1990年代に)ロシアの少年3人が国境を越えてポーランドに入国するがすぐにロシアに送り返された」などとあって、事件の発生時期に食い違いはあるものの、こうした出来事が実際にあったことを知らされ、ストレスは驚きが変わった。

誰も表現できない魅力

それはさておき、子どもたちが歩き続けて国境をめざすロードムービーでもある本作は、終始3人の子どもたちがスクリーンの真ん中に登場する。だから映画の出来不出来は彼らにかかっているといってもいいのだが、その意味ではまさに大成功だったと言うほかない。誰一人として演技経験を持たないという少年3人のうち、2人は映画でも現実でも兄弟だったが、特に弟ペチャ(演じるのはオレグ・ルイバ)には本当に“参って”しまった。



演技を超えた彼の一挙手一投足が醸し出す愛くるしさは、誰もが無条件で受け入れるしかないものであって、兄たちは、足手まといを怖れて置き去りにしようとする気持ちを翻し、市場の女性は物乞いする彼に食料を分け与える。また、少年たちと出くわした婚礼の一行にあっては、花嫁が惜しげもなく彼に硬貨を渡す。それもこれもひとえに、ペチャのしぐさ一つ一つに打ち

勝ち難い魅力を感じるからであろう。

つまるところこの映画は、ストーリーよりもむしろ、子どもたちのそんな自然でピュアな姿を映し出すことに主眼がある。観ているうちに、そう悟らざるを得ないのであった。

ゆえに困った。本作について述べるならば、彼らの持つ魅力を過不足なく表現することが必要だが、頭のどこをどうひねっても、それにふさわしい言葉が見つからないのだ。そこで、パンフレットの解説に助けてもらおうとしたが……、

『キッド』『禁じられた遊び』『汚れなき悪戯』『天使の詩』『ポネット』…、映画史に残る子どもたちを描いた名作の数々。今、そのリストに新たな子どもたちの傑作が加わります」

『明日の空の向こうに』が、ここに挙げた数々の子供を主人公にした映画の中でもかなり上位に位置するのは、作品をご覧になれば一目瞭然だろう」

「子どもは未来である」

虹センターの会議室には、「子どもは未来である」と書かれた額が飾られているが、この映画は、それをまざまざと思い起こさせるような作品だった。結局は誰もがその魅力を語り尽くせないとしたら、やはり観るしかない。それが今回の結論ですな。

* 2010 / ポーランド・日本

* 鑑賞データ 2013/01/30 109 シネマズ MM 横浜

* 公式 HP <http://www.pioniwa.com/ashitanosora/>

* Twitter への投稿 <http://coco.to/movie/20478>

<これまでの連載>

- 第1回 [プレシャス](#)
- 第2回 [クロッシング](#)
- 第3回 [冬の小鳥](#)
- 第4回 [その街の子ども](#)
- 第5回 [八日目の蟬](#)
- 第6回 [いのちの子ども](#)
- 第7回 [ラビット・ホール](#)
- 第8回 [サラの鍵](#)
- 第9回 [少年と自転車](#)
- 第10回 [オレンジと太陽](#)
- 第11回 [孤独なツバメたち](#)

* 題名をクリックすると本文へジャンプします。